

第 6 章

ESD 情報を共有する

＜情報共有プロジェクト＞



ESD-J ウェブページ

情報共有プロジェクト 年間活動報告

情報共有プロジェクトチーム・リーダー 清水悟

情報共有プロジェクトチーム（情報 PT）では「ESD および ESD-J に関する情報の収集・発信を通じて、会員内外へ ESD および ESD-J の理解を促進し、ESD の活動を活性化すること」をミッションとして、ESD レポートの発行やウェブサイトの運営などに取り組んでいる。ネットワーク組織の活動は成果がみえにくいといわれがちだが、発信情報の質と量を向上させること、それを可能にする体制をつくることで、ESD-J および ESD 活動を活性化していきたい。

活動の概要

(1) 「ESD レポート」の発行（126 ページ）

「ESD レポート」を以下の 4 回発行した。6 月 15 日（第 8 号）、11 月 15 日（第 9 号）、1 月 15 日（第 10 号）、3 月 15 日（第 11 号）。

内容的には、「ESD シナリオづくりプロジェクト」「学びの場をデザインする」「ESD なんでも相談室」の 3 コーナーを新設し、「ESD シナリオづくりプロジェクト」は 3 回にわたって特集。また、手にとって読んでいただく魅力あるレポートにするために、文字量を減らし写真を多用するなどして、記事のビジュアル化をすすめた。

また、WEB サイトとの連動性を強化し、「ESD シナリオづくりプロジェクト」「用語集」「ESD なんでも相談室」などは、レポートとほぼ同時にウェブに掲載した。

(2) テキストブックの発行（128 ページ）

「ESD とはなにか」という疑問に誰もがシンプルに答えられるようにというねらいで、12 月、一般向けのわかりやすい ESD 入門ブックを作成・発行した（『わかる！ ESD テキストブック シリーズ 1：未来をつくる「人」を育てよう』）。初版 5,000 部印刷、3 月末現在約 3,800 部受注。

11 の大学の他、高校、地方環境事務所、自治体、団体会員などから 100 冊単位の注文を得たことから、ESD の教材という分野への可能性をみいだせた。また非会員の購入比率（注文者数）が 56% と多かったことから、ESD の基本的な理解へのニーズが会員外でも強いことを認識させられた。

(3) ウェブサイトへの各種情報の掲載（124 ページ）

イベント案内、地域ミーティングの開催告知、政府の動向などを随時掲載するとともに、「ESD レポート」に掲載した「ESD シナリオづくりプロジェクト」「用語集」「ESD なんでも相談室」などをほぼ同時に掲載した。また、ESD-J の各プロジェクトチーム（PT）の取組みを必要に応じて掲載したほか、新規の団体会員の情報や、理事会の議事録など組織としての情報の公開も行なった。さらに、上記テキストブックの販売コーナーも新設した。

この ESD-J のウェブサイトへのアクセスは、月間平均約 30,000 ページビューである。

今後の活動の方向性

2007 年度以降の取組みに向けて検討すべき課題は、以下のとおりである。

(1) 情報 PT の体制強化の課題

2006 年度 2 名メンバーを拡充できたが、メンバーの継続的参加がむずかしいために、企画全体を念頭に置いて作業を分担化しにくく、編集作業などへのメンバーの参画が部分的なものにとどまりがちだった。また、情報ソースは事務局が把握している以上のものを集めてくるにはいたらなかった。

2007 年度はやりがいのある仕事を創出し、メンバーが継続的に有機的関係を実感しつつ参画できるような体制づくりに取り組むとともに、情報ソースも、事務局がつかんでいる情報だけに依存するのではなく、各方面から直接収集できるような体制強化を考えたい（たとえば、地域 PT の地域レポーター制との連動、各 PT から直接情報を収集するしくみ、ESD シナリオづくりプロジェクトの構成団体との連携、ESD 関係機関連絡会議への参加もしくは参加者からの情報収集など）。

(2) 情報ニーズの分析と戦略づくり

これまでは、ESD とはなにかを知りたい、地域への働きかけ方・行政への働きかけ方のノウハウを知りたいというあたりが求められている情報ではないか、という想定のもと、地域での ESD 的取り組み事例の紹介や、ESD-J 各 PT の動きや世界の動きの報道、用語集などによる ESD の概念紹介などを行ってきたが、誰を主な対象やサブの対象として設定し、それぞれにどのような情報を提供してゆくのかについて、改めてみなおしをはかり、戦略を立てて、意識的にアプローチするようにしたい。

(3) 各媒体ごとの主な検討課題

- ① ESD レポート：ESD レポートの完成と同時に、ウェブにも掲載できる体制の確立。
- ② テキストブック：好評だったテキストブック『わかる！ ESD テキストブック シリーズ 1：未来をつくる「人」を育てよう』の継続企画をどうすすめるか。
- ③ ウェブサイト：情報ニーズ把握のためのアクセスログ分析の定期的実施や、イベント情報の各地方からアップして更新頻度とアクセス数の増大をはかる、リアルタイムな情報発信ができる体制づくり、トップページのリニューアル（重要情報が時系列的に沈んでいかにしないようにする構造的変更）、ポータルサイトなど地域の情報が豊かに共有されるしくみの形成など。
- ④ HP 更新情報、その他を会員に届けるメールマガジンの発行。

ESD-J ウェブサイト

昨年リニューアルを図ったESD-Jのウェブページ。今年度は、ESDレポートで紹介した記事の詳細版をウェブにもアップし、紙媒体と電子媒体の連携を高めるとともに、イベント情報やESDに関するニュースの配信を中心に、コンテンツの更新を図った。

また、シナリオプロジェクトについては、プロジェクトのプロセスをていねいに報告したページを作成したり、テキストブックの販売ページを充実するなど、いくつかの新しい試みにも取り組んだ。

ESD-J
「持続可能な開発のための教育の10年」推進協議

English

ホーム 団体概要 会員ネットワーク 入会のお誘い サイトマップ

ESDとは? 事例にみるESD ESDキーワード よくある質問 発行物ダウンロード

“未来をつくる教育”をつくる

2005年から、日本の提唱により「国連 持続可能な開発のための教育の10年」がはじまります。
ESD-Jは、日本国内での民間ネットワーク団体として、“未来をつくる教育”をかたちづくる試みに、世界とともに取り組みます。

**ESD入門テキスト完成！
わかりやすい解説と事例を掲載**

詳細はこちらへ>>>

最新のニュース

韓国でアジアの仲間とESDの事例収集を議論
アジアESD | 2007年 05月24日

ESD-Jは、トヨタ環境活動助成プログラムとして実施中の「アジアESD推進事業～実践交流ウェブサイトの構築と実践ハンドブックの制作（Asia Good ESD Practice Project: AGEPP）」の第2回会合を、4月26～29日に韓国の統営(トンヨン)市で開催しました。

続きを読む「韓国でアジアの仲間とESDの事例収集を議論」

統一地方選挙向けESD-Jアピール
政府に働きかける | 2007年 03月26日

一週間の週末に行ったESD-Jの理事による政策提言議論の結果、統一地方選挙に向けたアピールを出すことになりました。環境省記者クラブと都庁記者クラブで、このアピールを発表し、また理事により全国の都道府県知事選挙候補者らにも発送が進んでいます。

(緊急アピール文および報道発表資料のダウンロードは詳細画面にて)

続きを読む「統一地方選挙向けESD-Jアピール」

地域のESDを促進する施策の紹介 ～各省の来年度予算から
賛成を届ける | 2007年 02月23日

環境省、文部科学省など各省で来年度実施を予定しているESD促進につながる施策の中から、地域の教育委員会やNPOなどが申請して活動資金が得られる施策について紹介・紹介します。
詳細や最新の情報に関しましては、各省庁へご確認ください。

サイト内検索

検索 by Google

検索

過去のニュース

・全ニュースの一覧
(更新情報)

カテゴリ

・イベント案内
・イベント報告
・地域をつなぐ
(地域PT)
・政府に働きかける
(政策提言PT)
・世界とつながる
(国際PT)
・情報を届ける
(情報共有PT)
・アジアESD
(AGEPPのサイトへ)
・ESD関連資料
・メディアに登場
・ESD-Jへのメッセージ

ESD-J トップページ
http://www.esd-j.org/

ESDテキストブックの販売

メニュー > テキストブック

ESDテキストブックが完成しました！

ESDがよく分からない！という方に最適です
ESDをこれから学ぼうという、学校教育、社会教育、民間教育、市民活動に関わる方へ「ESDってなに？」という疑問に、誰もがシンプルに答えられるためのこの冊子はつくれました。
ここには、みなさんの教育や地域づくりにESDを活かすためのヒントがあります。
あなたも一緒に、地球の未来のために必要な「人」の育て方について考えてください。

一般価格：1500円(税込み)
会員価格：1450円(税込み)

その他注文に応じた割引プランもあります。詳しくはこちらまで

初回5000部印刷しましたが、増刷の予定は今のところありませんのでまとまった数をご利用の方は、お早めにお申し込みください。

また、10冊以上お申し込みの方には、本テキストブックと連動したESD解説用のプレゼンテーションデータ(ppt)を差し上げます。

■目次(画像をクリックするとサンプルのPDFファイルが開きます)

■第1章 地球の未来のために

1. 持続しないもの……
2. 豊かで人間らしい暮らしを考える
3. なぜ「教育」なのでしょう？

第1章P4～7(PDF 888kb)

■購入する

■サンプルを読む

1章P4～7(PDF 888kb)
2章P8～11(PDF 1.1Mb)
3章P12～15(PDF 1.3Mb)

■運送の手続き

■ESD解説用プレゼンテーション

テキストブック販売ページ
http://www.esd-j.org/esd-text/index.html

ESDシナリオプロジェクト

メニュー > シナリオプロジェクト

ESDシナリオプロジェクト

～ESDをそれぞれの教育で活かしてもらうために～

環境教育や生涯教育、人権教育、平和教育など、地域や地域の課題に取り組んでいるさまざまな教育活動。それぞれの活動内容は異なっても、そこにはより良い未来を創りたい、そんな社会実感を抱く仲間を増やしたいという共通の思いがあります。その思いがESDの大切なエッセンスにつながることを私たちは考えています。このプロジェクトでは、この分野を模索した共通エッセンスを導くことで、ESDの本質に近づきたいと思っています。

プロジェクトの軌跡

■レポート1
〇〇教育からのメッセージ
～分野を超えて大切にしたい価値観～

＜2006年11月22日 掲載＞

■レポート2
ESDの大きなシナリオ
～ESDに向かう大きなシナリオを描こう～

＜2007年1月17日 掲載＞

■レポート3
ESDの小さなシナリオ
～教育の現場で生まれる、ESDの「未来」シナリオづくり～

＜2007年3月24日 掲載＞

このページの先頭へ

シナリオプロジェクトページ
http://www.esd-j.org/scenario/index.html

しかし、ESD に関する情報が集約された、ESD のポータルサイトとして活用されていくためには、国内外のさまざまな動向をさらにていねいに掲載していくことが必要であると認識している。今後は、各プロジェクトチームや関連機関などとも連携しながら、さらに情報の充実を図りたい。

閲覧コンテンツ BES10

順位	コンテンツ
1	ESD とは
2	ESD-J とは
3	イベント案内
4	テキストブック販売
5	事例に見る ESD
6	キーワード
7	会員ネットワーク
8	発行物ダウンロード
9	Q&A
10	入会案内

(参考：2007 年 1 月 5 日～2 月 16 日)

月別アクセス数 (ページビュー)

4 月	30,602
5	33,672
6	33,390
7	26,361
8	26,744
9	25,277
10	26,393
11	26,745
12	33,599
1	30,123
2	27,273
3	29,033
年間合計	349,212
月平均	29,101

リンク元サイト BES10

順位	サイト名
1	yahoo
2	google
3	msn
4	EIC
5	goo
6	ウィキペディア
7	biglove
8	環境省
9	mixi
10	文部省

(参考：2007 年 1 月 5 日～2 月 16 日)

2006 年度の ESD レポート (Vol.8 ~ 11)

地域で ESD をすすめるヒントとなる紙面に

ESD の理解促進と ESD の最新動向の共有を目的に継続的に発行した。今年度は記事のビジュアル化をすすめるとともに、9 号より「ESD シナリオづくりプロジェクト」「学びの場をデザインする」「ESD なんでも相談室」の 3 コーナーを新設し、より地域で ESD を実践する多様な人への効果的な情報提供をめざした。また、ESD レポートに掲載したコンテンツを WEB へ掲載するだけでなく、誌面の都合上紹介できなかった詳細な情報などを WEB へ掲載すること（シナリオプロジェクトなど）にも取り組んだ。

発行部数：各号 5,700 部

第 8 号 (6 月 15 日発行)

- ◆特集：ESD の 10 年日本実施計画、あなたはどう読む？
- ◆国際的な動き、地域の動き、政策提言の動き
- ◆ESD とつながろう
 - 環境省発 ESD 促進事業
- ◆ESD を知ろう
 - ESD 基本用語集 8
 - 環境教育、環境基本計画、生物多様性
 - ESD 関連の本
- ほか



第 9 号 (11 月 15 日発行)

- ◆特集：ESD シナリオづくりプロジェクト 1
 - 〇〇教育からのメッセージ
 - ～分野を超えて大切にしたい価値観
- ◆シリーズ 学びの場をデザインする 1
 - 浜松に生きる日系ブラジル人・ペルー人高校生によるミューラル・プロジェクト
- ◆ESD なんでも相談室 1
 - ESD のメリットってなんですか？
- ◆ESD 基本用語集 9
 - ジェンダー、平和教育
- ◆ESD INFORMATION
- ほか



第 10 号 (1 月 15 日発行)

◆特集：ESD シナリオづくりプロジェクト 2

私と〇〇教育～ ESD への大きなシナリオを描く

◆シリーズ 学びの場をデザインする 2

地域に学び 地域に還す 富山高専学生・学校・地域の学びの連鎖

◆ ESD なんでも相談室 2

持続可能な社会に、なぜ教育が重要なのか？

◆ ESD 基本用語集 10

GNH (国民総幸福量)、市民教育

◆ ESD INFORMATION

ほか



第 11 号 (3 月 15 日発行)

◆特集：ESD シナリオづくりプロジェクト 3

分野を超えた共育の芽

～ ESD への「小さなシナリオ」をつくる

◆シリーズ 学びの場をデザインする 3

暮らしを学びに 山村留学が子どもと村人を自立させる

◆ ESD なんでも相談室 3

地域の人たちに「ESD」をうまく伝えられません……。

◆ ESD 基本用語集 11

ディープエコロジー、人間開発指数 (HDI)

◆ ESD INFORMATION

ほか



ESDの基礎講座や研修にとっても便利!

ESD 入門テキストブック 第1弾

これからESDに取り組もう、学ぼうとするさまざまな人たちから「ESDってなに?」という疑問が寄せられる。そのような疑問に誰もがシンプルに答えられることを目的にESDの入門テキスト制作に取り組んだ。そして、さまざまな試行錯誤の結果、『わかる! ESDテキストブック シリーズ1:未来をつくる「人」を育てよう』を2006年12月に発行することができた。初版5,000部印刷したが、会員のみならず、非会員の方からも多くの注文をいただき、発行後3ヵ月で3,800部を受注した。

この冊子には、みなさんの教育や地域づくりにESDを活かすためのヒントがある。ぜひ今後皆さんの活動にお役立ていただきたい。

A5サイズ 全64ページ

会員価格450円、一般価格500円

お申し込みは www.esd-j.org/ より

■第1章 地球の未来のために

- 1 持続しないもの……
- 2 豊かで人間らしい暮らしを考える
- 3 なぜ「教育」なのでしょう?

■第2章 ESDという教育

- 1 ESDという教育の大きな枠組み
- 2 ESDの進め方
- 3 すでにスタートしているESDの取り組み

■第3章 学びの場のデザイン

- 1 学校と地域のつながりが育む、伝統という学び
- 2 浜松に生きる日系ブラジル人・ペルー人高校生による ミュール・プロジェクト
- 3 地域に学び 地域に還す 富山高専学生・学校・地域の学びの連鎖
- 4 放置自転車で平和構築 松山の「銃を鋤へ」プロジェクト
- 5 先人の「不屈の精神」と「住民自治」に学ぶ 震災復興に挑む山古志村

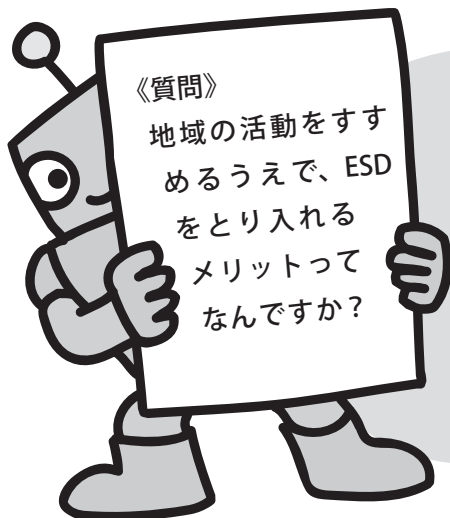


*本事業は Panasonic&EFF 環境サポーターズ☆マッチング基金の助成をいただき実施した。

ESD なんでも相談室 開設中！

ESD レポート vol.9～11 より

※あなたの質問を ESD レポートで回答します。
ご質問は ESD-J 事務局まで（連絡先：奥付参照）



《質問》

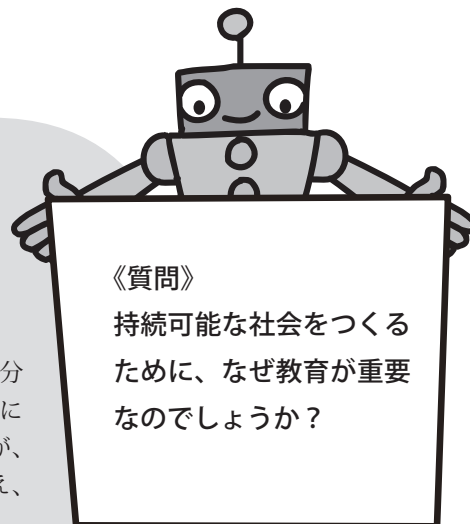
地域の活動をすすめるうえで、ESD をとり入れるメリットってなんですか？

お答えします

ESD という考え方をきっかけにして、地域活動をしているさまざまな人や組織がつながる場をもてるということではないでしょうか？ とくに環境や福祉、子育て、人権、地域産業の活性化など、それぞれの課題をもって活動している人たちは、同じ地域にありながら、まったく別々に活動をしているケースが少なくないと思います。それらの人たちが ESD というキーワードで集い、多様な価値観とノウハウをもちよって、地域の未来を考え、創造する取組みが全国で広がっています。

お答えします

現在、多くの人々は、持続不可能な地球の状態に気づきつつあります。しかし、それを解決するのは他の誰かで、自分自身ではないと感じている人がほとんどです。一方で、電気を節約しなさい、差別をしてはいけません、と知識やモラルを伝えるだけでは根本的な解決にはつながりません。今の社会の問題を自分自身で考え、さまざまな人たちと協力し、よりよい方向へ主体的に変えようとする価値観や能力を育てること。遠回りのようですが、＜教育＝人づくり＞こそ、社会のしくみを私たち市民の力で変え、持続可能な社会へとつなげるととても重要な営みなのです。

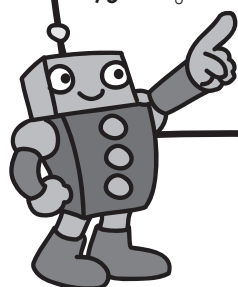


《質問》

持続可能な社会をつくるために、なぜ教育が重要なのでしょうか？

《質問》

地域の人たちに「ESD」をうまく伝えられませんか……。



お答えします

ESD は包括的で、その方法や形も地域によって多様です。ゆえに具体的な姿がみえずに、「むずかしい」「わかりにくい」印象を与えます。

しかし ESD という言葉や概念からスタートする必要はないかもしれません。まずは、地域の問題をみつめなおし、その問題解決をさまざまな人たちで考え、できることをはじめる。動きながらいろいろな人が参加し、その学び合いの場を大切にしていこう。そういう活動をおして理解されていけばよいのだと思います。

ESD とは、地域の将来を私たち自身の手で一緒につくること。みなさんの地域における ESD はなにか？ アイデアをだし合うことそのものが、ESD の第一歩といえるでしょう。

ESD 基本用語集

環境教育

日本の環境教育の原点である「公害教育」は、教科書に載る前の 1960 年代から、小・中の社会科を中心に自主的実践が行われていた。一方、「自然保護教育」も同時期にはじまっている。高度成長による公害や自然破壊に対し、社会的公正や生物多様性などの " 経済的価値以外の価値 " を提起し続けてきた点で、日本の環境教育は ESD の源流といえよう。1980 年代以降は「自然体験学習」が登場し、さまざまなプログラムが開発されるが、その本質は、科学技術文明を際限なく追求する人間社会にとって、自然的存在である人間が自然からますます遠ざかることを問題としてとらえられるか、にあることを忘れてはいけない。(上條直美)

環境基本計画

法的根拠は、環境基本法第 15 条にあり、政府の環境保全に関する総合的・長期的な大綱、および、施策を推進するための必要事項を定める。1992 年のリオ会議を発端に国際動向を踏まえつつ、より踏み込んだ持続可能な経済社会の具体像と道筋を示す傾向にある。平成 18 年 4 月に閣議決定された第三次環境基本計画では、評価可能な定量的な目標や指標の導入を試みており、計画からより具体的な行動への性格を強めている。なお、政府の支援もあり地方公共団体版環境基本計画も定着しつつある(平成 15 年実績で 377)。(小栗有子)

生物多様性

すべての生物の間の変異性をいうもので、遺伝子の多様性、種の多様性、生態系の多様性を含む。クローン生物は個体数が多くても遺伝子の多様性はひとつであるとみなされ、遺伝子、種、生態系の多様性は相互に関連している。生物多様性は、里山保全や外来種の問題、遺伝子資源の問題や農林水産業とも関連が深い。例えば、単一の商品作物の栽培では、病害虫の被害が拡大しやすく持続性が低い。そこで、生物多様性を生かした試みとして、植樹と農業、畜産を組み合わせたアグロフォレストリーなどが注目されている。なお、1993 年から「生物の多様性に関する条約」が発効している。(野田恵)

ジェンダー

生物的な性の違い (sex) に対して、社会的・文化的に規定されている性差をジェンダーと呼ぶ。ジェンダーという言葉は、性差別につながる社会的につくられた「男らしさ」「女らしさ」に、敏感に気づく視点を私たちに与えてくれる。その重要性は、1995 年の北京宣言でも確認された。

性の違いに由来する固定的な観念にとらわれずに、能力や個性を豊かに伸ばす社会の実現にも、ジェンダーに敏感な視点は欠かせない。だが今日では、ジェンダーという用語自体の使用を制限する動きがある。このことがジェンダーについて自由に考え、学ぶことの制限につながることを危惧する声もある。(中村香・野田恵)

平和教育

日本の平和教育は、終戦後、「教え子を再び戦場に送るな」というスローガンとともに「反戦・反核教育」

として始まった。平和教育の出発点は憲法と教育基本法であり、「平和のうちに生存する権利」をすべての人が行使できるようになることを使命とする。世界的にもユネスコ憲章（1945）において基本的人権および自由の尊重が平和実現への道筋であることが謳われている。

日本でも、被爆国としての平和教育のみならず、東アジア地域の平和構築、そして世界全体の平和、正義を求める平和教育への転換が求められている。（上條直美）

GNH（国民総幸福量）

Gross National Happiness の略で「国民総幸福量」と訳される。GNH は「幸福」を指標化するものというよりも、従来の経済発展が、格差の拡大や環境の破壊、文化の喪失などをもたらすものであることを指摘し、豊かさとはなにかを問いなおす視点を提起した点で注目を集めている。1976 年にブータンのワンチュク国王が「GNP（国民総生産）よりも GNH のほうが重要である」と述べたことで、世界的に知られた。ブータンでは、GNH を具体化する開発の原則として、（1）平等で均等な経済成長と開発、（2）文化遺産の保護と伝統文化の継承・振興、（3）自然環境の保全、（4）グッド・ガバナンス（市民参加型の統治）、がある。（野田恵）

市民教育

市民教育は、Citizenship Education の訳で、英国で 2002 年から中等学校段階に新しい教科として導入された。従来行われてきたボランティア学習やインターンシップ（職業体験学習）など教科横断的な学習活動が素地となっており、英国が労働党政権に移行したことも実現への大きな推進力となった。カリキュラムのねらいは、「社会的責任」「地域社会への参加」「政治的理解力」の 3 点。子どもたちが地域社会にかかわり、社会を変えていく市民となるための教育として期待されている。（上條直美）

ディープエコロジー

ノルウェーの哲学者アルネ・ネスが、1973 年に論文で提唱した。現在の文明や社会を前提とする人間中心主義のエコロジー運動を「浅いもの（シャロウエコロジー）」として批判。地球規模の環境問題を生みだした、現在の社会システムと文明それ自体の変革を主張する「深いもの（ディープエコロジー）」の重要性を説いた。自然との一体化や生命中心平等主義を主張。人間の自然支配を批判し、人口減少の必要性を強調する。そのため人間同士の不平等な関係（暴力や貧困など）を軽視しがちな点は批判も受けたが、人と自然のつながりの回復、環境に負荷をかけない暮らし方の模索、地域主義などへの実践面で広く影響を与えている。（野田恵）

人間開発指数（HDI）

国民総生産（GNP）や国内総生産（GDP）は、経済開発という視点からの指標であり、人々の生活の質を問うという視点からは十分でない。より人間的な指標づくりが試みられた結果、出生時の平均余命、識字率および基礎教育の普及、一人当たりの実質的な GNP が、経済開発に代わる人間開発の指数を算出する 3 要素として選ばれた。1993 年に国連開発計画（UNDP）が『人間開発報告書』でこの指数を発表すると、社会の関心を集め、新たな開発戦略の推進力、すなわち「人々が、長寿で、健康かつ創造的な人生を享受するための環境を創造する」力となっている。（上條直美）

シリーズ 学びの場をデザインする ①

浜松に生きる日系ブラジル人・ペルー人高校生による ミューラル・プロジェクト

NPO 法人 浜松 NPO ネットワークセンター

ミューラルとは、コミュニティの「問題」「希望」「誇り」などのメッセージを込めて、地域の人々とともに公共空間に絵を描く表現芸術。9名の日系ブラジル人・ペルー人高校生たちが、困難を克服して学ぶ外国人高校生の存在を、同じ境遇の子どもたちや市民へ伝えようと、巨大な壁画づくりに取り組み、多文化共生のまちづくりに踏みだしました。

はじめの一步

— 移住労働者の子どもたちが抱える課題

浜松市では人口の4%、23,000人が外国人移住労働者とその家族です（※2005年4月、旧浜松市統計）。外国籍の子どもは義務教育の対象とならず、また金銭的な問題や言葉の問題が障壁となり、高校への進学率はきわめて低く、工場労働者以外の職業を得ることがむずかしいのが現状です。

「このままでは貧困の再生産を繰り返すだけ。外国人も勉強すれば将来が開ける、"当事者のロールモデル"が必要だ」。浜松 NPO ネットワークセンター（通称：N-Pocket）の代表、山口祐子さんはそう考え、ミューラルをその突破口にして若者のリーダーを育てようこのプロジェクトを起こしました。そして、市内の高校を一軒一軒訪問し、校長先生の理解を得ることから始め、日系ブラジ

ル人・ペルー人高校生の参加者を集め、協力者として美術の先生と美術部部員の参加を得て、2003年春にこの活動がスタートしました。

学びのデザイン

— 壁画の作成プロセスが学びの場

導入として参加メンバーは「演劇ワークショップ」や「貼り絵」の創作を通して、「仲良くなること」「表現すること」を体験しました。次に、お互いのライフヒストリーを聞き合いました。どうやって日本にきて、どんな困難があったか、それをどう克服したか、どうやって高校に入学できたか、これからの夢や進路の希望などについて、これらを意識化、顕在化してメッセージにまとめていく作業はとても大変でしたが、誰になにを伝えたいのか、なにを盛り込みたいのか徐々に明確になっていきました。



さまざまなポーズを撮影し、モチーフを下絵に表現していく



のべ160人が参加した、コミュニティ・ペインティング・デイ



完成した長さ 11 メートルの壁画

夏にはサンフランシスコを訪れ、商店街や小学校の壁に描かれたミューラルを見学、ミューラル・アーティストのケンダル・オウさんから制作方法や表現方法などを学びました。表現したいことをポーズで表し、写真を撮って絵のモチーフにし、壁画全体の下絵をつくっていく、下絵づくりの作業からは日本人の美術専攻の生徒たちも大いに活躍しました。また、巨大な壁画に使う画材は自分たちで「こういうメッセージを絵に描くので、画材をください」と寄せ書きした手紙を企業に送り、5社から協賛を得たそうです。

そして、2005年9月、市内の大学と高校で3日間「コミュニティ・ペインティング・デイ」を開催、子どもから大人まで、のべ160人の人々が壁画ペインティングに参加しました。いろいろな人が「一緒に色を塗る」という時間は、さまざまなコミュニケーションを生みだします。多くの人々が、身近にいながら接することの少なかった日系の高校生たちの境遇を知り、彼らが抱えている悩みや希望に気づくことができました。

そしてようやく完成した壁画には、祖国での家族との思い出、乗り越えた困難、彼らの希望＝「あきらめないで」「今が学ぶとき」「あなたはひとりじゃない」「夢に向かって」というメッセージがみごとに表現されました。その作品は静岡文化芸術大学の学園祭や国体イベントの背景としても活躍し、「国立民俗学博物館」にも展示されました。

学びの成果

ー ミューラル・プロジェクトから生まれたもの

ミューラルは参加した学生たちに「リーダーとしての自覚」と、「ともに行動を起こす仲間」をもたらしました。山城ロベルト・アレックスさんは現在大学生。このプロジェクトの参加者4名とともに外国籍の高校生たちのサークル「AJLAN」（日系南米わかもの協会）を立ちあげ、「母国語教室」や「進学相談会」などのアイデアを、N-Pocketのサポートを得て、ひとつずつ実現しつつあります。

参加者の声

ー ミューラル・プロジェクトに参加して

山城ロベルトさん：「私たちはたくさんの人の力でミューラルという体験ができました。私も周りの人を助けられるようになりたい。私たちと同じ困難を繰り返さないために、私たちから始めなくては、と思っています」

（取材報告：村上千里）

NPO 法人 浜松 NPO ネットワークセンター (N-Pocket)

地域が抱える課題を当事者（子ども・障害のある人・在住外国人・高齢者など）とともに事業化して、多様な市民が参加できる活動スタイルを展開する NPO。

〒432-8021 静岡県浜松市佐鳴台 3-52-23

TEL&FAX 053-445-3717 <http://www.n-pocket.jp/>

シリーズ 学びの場をデザインする ②

地域に学び 地域に還す

富山高専学生・学校・地域の学びの連鎖

富山工業高等専門学校

富山工業高等専門学校では、「専攻科特別演習授業、通称 PBL (Problem-Based Learning)」という、とても興味深い授業が行われています。

この授業のコンセプトは「地域に役立つ・ひとに優しいものづくり」。19名の学生が地域とかかわりながら、じつにいきいきとものづくりをしています。

学校だけでは十分に学べない

「地域に求められるものづくりを、地域の人たちと話し、その学び合うプロセスを授業にすることができないだろうか？」そんな担当教員らの熱い思いから、この授業は始まりました。

コミュニケーションの苦手な技術系の学生に、いきなり参加型授業・ワークショップはむずかしいと考え、まず学生への問いかけから始めました。「地域の人たちが困っていることはなんだろう？ 自分たちの技術力でできることはないだろうか？」。これまで考えたこともなかった問いかけ

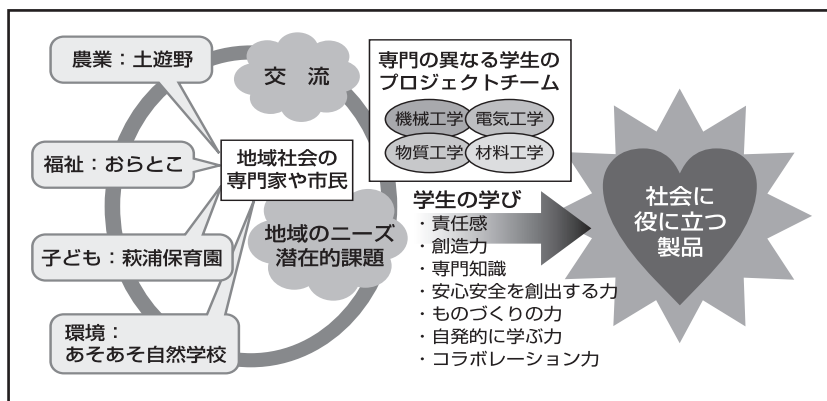
に、学生たちは戸惑いました。しかし、じっくり彼らに話しかけ、地域の人との出会いの場を設け、地域の人々の熱い志に触れてもらううちに、自分たちの存在価値をみいだしたのです。「自分たちの技術や学んだことが、誰かに役立つかもしれない」。学生のまなざしは変わり、学びの欲求が高まり始めました。

参加型・地域連携型の教育スタイルへ

今年で三年目となるこの授業は年々進化しています。一年目は迷いながらすすめたこともあり、ものづくりまでたどり着けませんでした。その反省と課題を踏まえ、担当教員らは新しい教授法を開発していきました。「先行きや効果が不確実なものもあるが、活動のほとんどを学生の自主性に任せている。教員らは学びのファシリテーターと、地域社会とのコーディネーターに徹している。この授業は、学生と教員との信頼関係で成り立っている」。そして、うまくいかない部分に真剣に向き合い、「なんとかしよう」としている学生の姿に、技術者としての責任感の芽生えと学びへの意欲を感じました。

従来の知識詰め込み型の教育スタイルから、参加型・地域連携型に方向転換させることは容易ではありません。しかし、学生の変化や地域の人た





富山工業高等専門学校

実践的かつ創造的技術者の育成をめざし、産学の共同研究や企業技術者の育成支援など地域貢献にも力を注ぐ高等専門学校。

<http://www.toyama-nct.ac.jp/>

ちの評価によって、担当教員らは自信をつけてきました。学生、教員、地域の人たちの距離感が縮まり、その学びの連鎖が、少しずつ地域にも波及しています。

かかわった人たちの声～学生のみなさん

「今までは受身の授業ばかりで学ぶことがおもしろいとなかなか思えなかったけど、この授業は自分たちの興味ですすめ方などを決めることができるし、地域の人たちの話を聞くと視野が広がるのでやる気になります。『役に立っている』という実感があるし、ものをつくっていても、相手の顔がみえるので、なんとかよいものを……と思います。チーム内で意見の食い違いなどもあるけれど、なんとか調整してすすめています。話すことが苦手だったけどその大切さにも気づきました」。

(取材報告：新海洋子)



技術者のタマゴがつくった道具

(抜粋・2006年8月現在 未成品を含む)

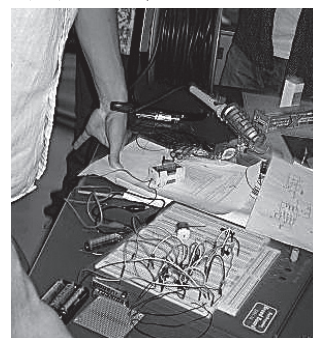
●リハビリ用「頭のプロテイン」〈協働開発先：おらとこ〉

「おらとこ」は、子どもからお年寄り、障がいのある人ない人、いろいろな人が訪れるサービス施設で、まちづくりの拠点でもあります。誰もが参加できる遊び道具、脳の活性化や指先の運動につながるように視覚や聴覚に刺激のあるもの、自らの判断が必要になるおもちゃを考えました。



●田で働くメカアイガモ〈協働開発先：土遊野農場〉

土遊野農場は、地域循環型農業を実践し、米づくりにアイガモ農法を取り入れています。しかし、アイガモ農法にはコストや手間がかかるため、アイガモの働きをするロボットをつくることにしました。アイガモは足ひれで水田の土を攪拌して、酸素を供給したり、雑草が生えないようにしたりします。



シリーズ 学びの場をデザインする ③

暮らしを学びに
～山村留学が子どもと村人を自立させる

NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター 野田恵

約 20 年前。学校の管理教育・進学競争の激化、校内暴力やいじめ、子どもの自殺といった学校病理が社会問題化するなか、小さな山村で子どもたちの「学びの場」を模索する試みが始まりました。

暮らしのなかに学びがある

都内の幼稚園教諭であった梶さち子は、フリープログラムの「自由キャンプ」を提唱する仲間たちと活動を始めていました。長期間自然のなかで寝食をともにするうちに、子どもたちに強い気持ちと行動力が芽生えていきます。「自分たちのものは自分たちでつくって暮らしてみたいね」。キャンプで体験した素朴な「暮らし」のなかに、「学び」があると感じた梶たちは、本格的に「地域に根ざした暮らしから学ぶ場」をつくることをめざします。

長野県南部の山間僻地、^{やすおか}泰阜村。ここでまず子どもたちは設計図を描き、家を建てました。図書館や五右衛門風呂、米づくりや野菜づくり、ニワトリの飼育、さらには登り窯をつくって食器づくりにも挑戦していきました。これがグリーンウッ



地元の方がしとめたイノシシをだいだらぼっちに持ってきた！！子どもたちの前で解体。みんなおっかなびっくり、興味津々。もちろんこの日の夕食は、いのしし汁

ドの主催する山村留学、「暮らしの学校 だいだらぼっち」の始まりです。

センターだけで完結する「施設」にしない

20 年後の現在も、教育理念は変わりません。村の学校に通いながら、暮らしに必要なものを自分たちでつくりあげる。子どもたちは木造の小屋で一年間の共同生活を営みながら、地域の方と交流し、「おじいま」「おばあま」の知恵から積極的に学びます。

例えば、ストーブや風呂の燃料として薪が不可欠ですが、子どもたちには自分たちの山がありません。地域の方に交渉し間伐材を手に入れています。このような活動ができているのも、グリーンウッドが設立当初から、センターだけで完結する「施設」にしないという思いのもと、子どもたちの通う学校はもちろん、地域との積極的な協力関係をつくるよう努力してきた歴史があるからです。

わしゃ、生まれ変わったら教師になりたい

1999 年、地域住民とグリーンウッドのスタッフが実行委員会を結成して、文部省（当時）と農水省連携事業の「こども長期自然体験村」を実施しました。村民がはじめて取り組んだ、子どもの体験活動です。「わしゃあ、子どものことはなんにもわからん」とくり返し口にしていた、木下藤恒さん（アマゴ養殖業）が、2 週間の受入れを終え



暮らしに必要な薪は、地元の山から伐りだして、子どもたちが薪割りする



改築された母屋の前で

数) が生まれていますが、参加者の食材は近隣農家と作付け契約を結んでいます。都会から自然体験活動に参加する子どもたちが地元農家と交流し、地域の方に

て都会の子どもたちを見送ったあと、当センターの事務局長である辻英之にこうつぶやきました。「辻君、わしゃ、生まれ変わったら教師になりたい」。

それまで村の豊かな自然を否定的にとらえていた住民たちでしたが、これを契機に、村民による「やすおか子ども体験村実行委員会」や泰阜グリーンツーリズム研究会が立ち上がり、自然体験イベントなどが継続して実施されるようになったのです。

村の自立を支えるしかけづくり

泰阜村は人口 2000 人に満たない小さな村。山村留学など都市山村交流活動の支援をすすめる松島貞治村長は、次のように語ります。「山村留学の卒業生やその保護者は泰阜村の応援団でもある。村の財政は厳しいが、人にお金をかける意味は大きい」。

都会の子どもをお客さんと呼び寄せ、一時的に児童数を増加させることに終始するような山村留学が多いなか、泰阜村は、僻地での不便な生活の教育的意義をしっかりと考えた政策をとってきました。山村留学の卒業生は、村の成人式に招待されますし、個人的にもしばしば泰阜村を訪れています。ここがまさに、かけがえのない第二のふるさとになっています。

また、当センターも村の厳しい財政事情をふまえ、村の自立に貢献すべく、さまざまな工夫を行っています。活動によって年間 1300 人以上の交流人口実

山村の文化や魅力などを語ってもらう機会を設けています。体験活動の地元講師は有給。生鮮食材は村内もしくは近隣地域で購入し、地元経済に還元されます。当センターの活動を、人的にも経済的にも地域全体の活性化につなげることで、村の自立を支えるしかけづくりを行っているのです。

【卒業生の声】矢満田祐樹さん・33 歳

(いだらぼっち 1 期生、中学 2 年生時に参加)

自分にとっていだらぼっちの経験はいろいろありすぎて、なかなか言い表せない。現役のときの経験を、いだらぼっちを卒業してから消化してゆく。今でもその経験を消化しているのかな。

例えば「段取り」の大切さは、大人になっての仕事でも実感する。段取りは、たんなる見通しではなく、みんなで結果を描くこと。20 人いればそのイメージはばらばらだから、話し合っ、いい意見に寄っていったりして、イメージをすり合わせてゆく。1 年間かけて家を建てるからには、譲れないこともでてくる(筆者注:当時、家の建設をしていた)。ケンカになったりしたけど、できあがって形になっていくから達成感はあったし、卒業してから家も建てたことが誇りになっています。

グリーンウッド自然体験教育センター

南信州泰阜村に拠点を置き、豊かな自然や文化を生かした自然体験活動によって、青少年教育や世代間交流、都市山村交流を実践する NPO。

399-1801 長野県下伊那郡泰阜村 6342-2

TEL : 0260-25-2851 FAX : 0260-25-2850

<http://www.greenwood.or.jp>

シリーズ **学びの場をデザインする** ④

中山間地 災害復興 村の誇り ——先人の「不屈の精神」と「住民自治」に学ぶ

山古志共和国構想準備室事務局

中越大地震被災地の新潟県 旧山古志村 小松倉集落には、昭和初期に貧しい村人のツルハシだけで掘り抜かれた、日本一の手掘り隧道があります。子孫のためにと隧道を残してくれた先人に学び、今度は自分たちが次の世代へ「山古志」を残そうという意欲に燃えて、震災による絶望から立ちあがりつつある人々がいます。そこには、日本の中山間地の問題を考え、取り組むために大切な、学びとエンパワーメントの鍵がみえます。

地域の課題

震災前の旧山古志村は、棚田が広がり日本の原風景ともいわれる美しい山村で、牛の角突きや錦鯉の養殖など独特の文化や産業がありましたが、日本の多くの中山間地と同じく、過疎などの問題を抱えていました。

中山隧道と映画「掘るまいか」

中山隧道は、豪雪で陸の孤島となる村の住民を、50年もの間、死や病から救ってくれた命の道でもあります。昭和初期、行政への再三再四の陳情が聞き入れられず、村人たちは「俺たちで隧道を掘ろう」と決心しました。そして、幾多の困難に負けず、16年の歳月を費やして掘り抜かれた中山隧道は922m（現在残っているのは877m）。人が通ることができる手掘り隧道としては日本一の長さ

です。将来の村の幸せがこの手にかかっているのだという信念を胸に、当時の村人が一致団結した歴史は、人々の誇りでした。その誇りは、平成10年に新しく完成した中山トンネルによって隧道が役割を終えた後も、「中山隧道を残したい」という熱意となって、保存運動へと展開していきました。

同時に、当時の村人の偉業を後世に伝えるため、記録映画「掘るまいか」を制作しようという動きもでてきました。映画づくりは、制作委員会形式で資金を集めることから始まり、全国の方々のさまざまな協力を得て行われました。また、旧山古志村に隧道文化基金を設け、企業、団体、一般市民からも広く募金を集めました。撮影は、中山隧道の中に当時の掘削場面を再現しながら行われました。そして、住民や中山隧道を残していきたいと願う人々が自ら出演し、平成15年に完成しました。



今なお、村のあちこちで復旧工事が行われている

壊滅的被害をもたらした大震災

その山古志を平成16年10月23日、中越大地震が襲いました。山は動き、道は崩れ、家はもちろん先祖伝来の棚田や畑は埋まり、養鯉池は割れて水脈が失われました。全住民が避難を余儀なくされ、失意のどん底に突き落とされました。そのときのようなすを知る人は、異口同音に、「山古志



小松倉集落の村民の誇り「中山隧道」。
村人が子孫のためにと振るった“つる
はし”の跡がくっきりと残っている

村民のエンパワーに生かしていこうと、
全国から寄せられる善意をまとめあげて
いる中越復興市民会議事務局長の稲垣文
彦さん（左）。中山隧道掘削の歴史と山古
志人の生きざまを伝える映画「掘るまい
か」を日本中に伝えようと活動する上映
実行委員会事務局長の市嶋彰さん（右）



はもうダメだと思った」と言います。しかし、今、
人々が傾いた家に少しずつ帰り始めています。も
の失ったが心（文化）は失っていないことに気
づいた人たちです。

「掘るまいか」にいがた上映実行委員長の市嶋
彰さんは、最初は知り合いから頼まれて「掘るま
いか」の上映会をしました。しかし、震災後、被
災地ボランティアを経て、この映画の価値を再認
識します。

「例えば、本当の自治というもの、コミュニティ
の力、人間の尊厳、子孫に文化を伝えていくこと
の意義と重要性、それらが山古志にあったのです。
一人でも多くの人にそれを伝えたい」、そう考え
るようになっていました。そして、震災から2年
間、全国を奔走し、今までに100回以上のチャリ
ティー上映会を実現していったのです。

市嶋さんは、われわれ日本人が近代化のために、
西欧的な文明を吸収し、置き去りにしてきた“日
本文化遺産”こそ、“持続可能な地域”を保つ根
底に流れるものだと言います。

かかわった人たちの変化

やがて、かかわった人たちのなかに「山古志の
応援団」をつくろうという機運が盛りあがってい
きました。持続可能な地域として存在していた山

古志を守り、長期的な支援やつながりの輪を広げ
るために、「山古志共和国」構想を実現しようと
する計画です。それは、全国の山古志ファンを住
民登録し、地域通貨による物産の売買や、文化遺
産ツアー、村民との交流会など、支援のしくみづ
くりと学びの場づくりの計画として、平成19年
4月の設立に向けて賛同者を募っています。

また、市嶋さんは映画を観た全国の人の声を村
人へ届けます。「映画に悲壮感はなく、村民の方
たちの誇らしげな笑顔や話す姿がよかった」「自
信と誇りに満ちて、堂々と胸を張って生きている
姿にまいった。こういうふうにならねば」「涙が
でた。人のエネルギーのすごさを感じた。この隧
道はわれわれにとっても大きな財産。それを知り
伝えることは私にもできることです」。これらの
言葉は、村の人たちへ大きな勇気を与えています。

一方、行政サイドでも村人を支える人がいます。
震災当時、旧山古志村役場で村長を支える震災処
理の要にあった青木勝さん（長岡市復興推進室次
長）は、山古志人でありながらも復興への視点は
行政マンです。「日本全国の中山間地が元気を失っ
ている、今の時代に震災を受けたことに意味があ
る。都市部の豊かさに山間部の暮らしのあり方が
重要な役割を果たしてきたことに気づき、今、行
動を起こさなければ日本の未来はこない。ヤマの

問題は都市の問題。日本に暮らすわれわれ全員の問題なのです。私たちは、主体的な市民活動を応援しながら具体的な提言をしていきたいのです」。

そう語る青木さんは、震災後も信濃川の濁りが消えないことから、「山の暮らしを戻さなければ町の暮らしも成り立たない。今こそみんなで考えよう」と呼びかけています。復興の過程は、自分たちの暮らし方を真正面から考える学びのチャンスだととらえているのです。

中山隧道に象徴される、先人の不屈の精神と住民自治の姿勢に学んだ多くの人々が、村の復興に積極的に取り組み、さらには過疎の問題さえも解決しようと、確実に一步ずつ前にすすみ始めています。

(取材報告：伊藤通子)

山古志共和国構想準備室事務局

「掘るまいか」にいがた上映実行委員長の新潟市の市嶋彰さんと、映画の製作スタッフらが、山古志村の「恒久的な支援を」と発案、平成19年4月の建国に向けて賛同者を募る。

●映画「掘るまいか」や「山古志共和国構想」の関連ホームページ <http://1000yamakoshi.main.jp/>

かかわった人たちの声

●小松倉集落区長 小林正さん

24軒のうちやっと7軒が村に戻りました。集落は全滅で、私の田は2年経った今でもすべてが土砂の下です。でも、隧道に立つと、ご先祖さまへの感謝の気持ちと畏敬の念、同時にその一族であるという誇らしさや勇気が湧きあがってきます。新しく集落に住みたいという人や支援者などを村外から受け入れ、手を携えて村を残そうと話し合いを始めました。隧道から震災復興へと、“勇氣”を次の世代へと受け継ぎたいと思うようになってきました（全国の映画を観た人たちの意見を前に）。



小林さんのもとには、映画「掘るまいか」を観た全国の人から支援の声が届く。外からの支援者と共に村を元気にしていくことを考えている

●長島サキさん（71歳）

震災で家業だった養鯉資材販売店を失いました。でも、復興のために日本中からたくさんのボランティアさんや工事の方がきてくれるので、今年その方たちをお泊めする民宿を始めました。近くで採れる山菜や昔ながらの料理を、喜んで食べていただけるのがうれしいです。もっともっとたくさんの人たちにきてもらって、山古志のよいところを知ってもらおうのが、私の夢になりました。70歳から始めた民宿だけど、夢に向けて、楽しみながら、まだまだがんばりますよ。

